途に上り、四月豐前慶石城の攻撃に奮戰し、七月凱旋し、十七年關東の役には利家と共に軍を進め、六月八王子城攻撃に最も猛闘した。文祿二年閏九月晦日左近衛權少將に任じ、慶長二年九月廿八日參議を兼ね、十月守山から富山城に移り、三年利家の致仕するに及び、四月二十日越中礪波・婦負・新川三郡及び射水郡（氷見庄を除く）一部、能登鳳至・珠洲二郡を領し、從三位權中納言に任ぜられ、四年閏三月利家薨じてその遺領加賀石川郡（松任を除く）・河北郡及び越中射水郡氷見庄を併せた。同年八月廿二日利長大坂から歸國の途に就いたが、上國に於いては利長が異圖を抱くとの風説行はれ、家康は小松城主丹羽長重に討伐の先鋒を命じさへもした。時に利長は越中に居たが、報を得て直に金澤に歸り、横山長知を遣はして辯疏せしめた。十一月家康初めて長知を引見し、交渉數次、遂に利長の母芳春院を德川氏に質とし、秀忠の女を利長の嗣利光（後利常）の配として迎へることを約し、事漸く解決した。同年十二月二十日利長權中納言を辭し、五年正月使を江戸に派して、去年以來の矛盾に就き秀忠に謝し、三月長知及び有賀直政を大坂に遣り、家康に謁して更に諒解を得しめ、而して芳春院は五月江戸に下つた。この時豐德二氏の關係切迫し、六月朔日家康は上杉景勝將愬の爲に軍令を定め、次いで利長に津川口の先鋒を命じた。大坂方に在つても、毛利輝元・宇喜多秀家以下、七月十二日附の書を以て利長に加盟を求めたが、利長は之と絶つて東軍に屬した。七月廿六日利長先づ金澤を發し、八月三日大聖寺城の山口宗永を屠り、五日越前金津から軍を旋し、八日その後陣は淺井畷に於いて丹羽長重と戰ひ、十日金澤城に入つた、家康が八月朔日土方雄久を使とし、利長に美濃・尾張に來會すべきことを告げしめた命は、この前後に傳へられたものと解せられる。利長乃ち九月十一日再び兵を進め、十八日小松に於いて長重と和し、大津に出でて家康に謁し、廿八日大坂に入つた。是を以て利長は關ヶ原の大戰に參與することを得なかつたが、東軍の與黨として加賀に戰うた功亦尠くなかつたから、家康は十月十七日を以て、山口氏の江沼郡、丹羽氏の能美郡（白山下を除く）と石川郡松任、及びこの役に出師を辭躍した前田利政の前領能登口郡の内（口郡には外に長連龍の領鹿島半郡があつた。）を利長に與へ、その有する所加賀（白山下を除く）・能登・越中百二十餘萬石となつた。六年九月秀忠の女珠姫が利光に來嫁したので、利長は之を謝せんが爲七年正月八日啓行し、廿六日江戸に入り、次いで大坂に往き秀頼に謁して歸城した。八年幕府江戸の市坊を經營し、諸侯をして役を助けしめた時、利長もその一人であつた。十年三月家康・秀忠の西上するや、利長また利光を伴うて至り、四月之に謁した。是より先利長は退老の志あつたが、六月十六日重臣をして表書を上らしめ、廿八日封を利光に讓り、越中新川郡廿二萬石を隱居領として富山城に移り住み、十二年五月幕府の命を奉じて駿府城經營の役に從うた。十四年三月十八日富山城災に罹り、利長は魚津城に移り、次いで射水郡關野に築き、九月之に入つて高岡と改めた。十五年利長病を發し、將軍秀忠及び家康は屢書を致して狀を問うたが、秀忠の賜書の初めて三月廿七日に在るによつて、略發病の時期が察せられる。その後一旦輕快したが、十六年再發して歩行すら困難を感じたから、五月十七日利光及び諸臣に訓誡の書を與へ、社寺に祈禱を命じた。この年冬、利長はその養老封の中十萬石と、之に對する從臣とを剛いて利光に還附せんことを幕府に請ひ、十七年二月その許可を得た。蓋し當時豐德二氏の關係また穏かならず、大坂の諸將頼に利長をその黨に援かんとするものがあつたので、利長は自ら勢力を減殺して頼むに足らざるを示したものと思はれる。同年初冬病また重く、閏十月平癒を神佛に祈つた。しかも尚小康を保ち、その薨去は十九年五月二十日に在つた。享年五十三。法號瑞龍院聖山英賢大居士。高岡の郊外に葬り、後に瑞龍寺を建てゝ牌所に當てた。

マヘダトシナホ　前田利直　大聖寺藩主第三代。利明の三男、母は慈眼院。寛文十二年六月廿五日江戸に生まる。幼名大學、天和四年正月内記と改め、貞享三年十二月廿六日從五位下大内記に叙任、元祿四年八月十九日特に命ぜられて將軍德川綱吉の奥詰となり、五年七月九日封を襲ぎ、その内新田一萬石を弟利昌に分かち、十一日飛騨守は改めた。寶永元年六月廿三日初めて大聖寺に入部、三年十二月十九日從四位下に陞り、六年正月綱吉薨じたので廿一日奥詰を免ぜられ、二月十八日弟利昌に死を賜うて、四月十二日その領を返還せられた。七年十二月十三日江戸に卒。時に年三十九。法號圓通院悟性義覺大居士。實性院に葬つた。世本利直を利眞に作るものあるは誤である。又加賀藩の記錄には、利重に作つたものが多い。大聖寺藩では之を見ぬが、併し德川實紀にも利重とあるから、さうした誤であつたこともあるのであらう。

マヘダトシノリ　前田利義　大聖寺藩主第十二代。加賀藩主前田齊泰の三男、母は馨袖院。天保四年二月十八日金澤に生まる。幼名基五郎。嘉永二年八月廿六日先代利平の嗣となり、十月十七日家督を相續し、十二月十六日從五位下備後守に叙任し、四年十二月十六日從四位下に陞る。安政二年四月二十日江戸に卒し、五月廿三日發喪、享年廿三。法號諦嶽院賢道良哲大居士、實性院に葬る。

マヘダトシハル　前田利春　通稱縫殿助。寛永系圖には利昌に作り、又別に家則とし、利勝とするものもある。尾張荒子に於いて二千貫の地を領した。永祿三年七月十三日歿。法號を道機庵休岳居士といふ。子利家天正十四年京都紫野大德寺の塔頭興臨院の荒廢を興し、その畫像を安置した。興臨院は能登の守護畠山義總の創建した所である。利春の畫像は、能登鹿島郡小島の長齡寺にもあつて、大正二年四月國寶に編入せられてゐる。利春の室は竹野氏、天正元年十一月廿四日歿した。法號長齡院妙久大姉。利春の子女に、一利久、二利玄、三安勝、四利家、五寺西九兵衛の室、六秀繼、七本願寺坊官下間少進法印室、八高畠石見守定吉室長久院があつた。

マヘダトシハル　前田利玄　前田利春の次子、利家の兄。通稱三右衛門。尾張に生まれ能登に歿したが、その傳の詳を得ぬ。嗣なく、女子は安見隱岐元勝の室であつた。

マヘダトシハル　前田利治　大聖寺藩祖。加賀藩主第三代前田利常の三男。母は天德院。元和四年金澤に生まれ、幼名宮松丸。寛永十一年十二月十五日從四位下飛騨守に叙任、松